シークレット彼女

momoka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シークレット彼女

【Ｎコード】
Ｎ２７２６Ｆ

【作者名】
ｍｏｍｏｋａ

【あらすじ】
モデルのあたし，メイサ。大好きなあの人に、正体がばれてしまう．．友人まりかもこの恋に参戦！！果たして，メイサ…，つぐみの恋の行方は？？少女マンガ的少女のラヴコメディ！！

あたしはクラスでは地味な存在。
根暗なダサ眼鏡に、二つに分けてしばった髪。
友達はただ一人。
藤堂まりか。
彼女は学年一の美少女と言われている。…、そして読モ。
でも、あたしにもちゃんとした正体があるんだよ？それは・・・
モデル。！！！…なのです・・・
その正体を知っているのは、まりかだけ。まりかは友達でもあり、
良き理解者でもある。あたしの好きな人を知ってるのも彼女だけで、
その好きな人とは…
＜＜＜＜
「やっぱメイサちゃん超好きだわー♪なぁッ！！今度写真集出るらしいぜ！！」
メイサとは、あたしのモデルのときの名前。
そして、この声の主・昴くんがあたしの好きな人。背が高くって、
優しくて整った顔立ちをしている昴くんは、学校中から注目を集めるほどの人気者だった。こんなに地味に生活しているあたしにも、
昴くんは優しくしてくれる。

…、でも、昴くんはメイサの正体があたしだと知ったら、失望するだろうね。
「おい、櫻井！」
「は、はい？！」
あたしは昴くんに呼ばれて、おもわず立ち上がった。
「放課後、話あんだけど・・・きてくんねぇ？」
「うん・・・いいよ？」

よ・・・・・・・ッ、よよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよ・・・・・・・！！？？

呼び出し！？

心の中では、ぱんぱかぱっぱっぱっぱーん、と、ヨロコビボタンを連打していた。
　そして、胸の高鳴りがおさまらない中、あたしは放課後の、独特の静けさをもった図書室へと向かった。
そこには、すでに昴くんの姿があった。
「よォ。」
「あ…」
あたし今，絶対変な顔してる。あたしは顔をそらした。

「あのさ、俺…櫻井のこと…」
「昴くん…！！」
どうしよう！！あたし今、世界一幸せ！！櫻井のこと…、の　次は！好きなんだ…！！きゃーきゃー！
「応援してるからな！」
「え…」
あれ…？えっ、てゆうか、
「応援」って？？何が？？まさか・・・！？
「俺、ファンなんだ！」
やっぱり、ばれてる！？あたしがモデルだって…
「櫻井って、メイサちゃんなんだろ？」
ぎゃーっ！！これはマジだー！！
「な、ななな何の話？」
ヤバイ！
そして動揺を隠しきれない自分もヤバイ！！

すると、昴くんはあたしの眼鏡をはずして、ひっつめ髪もほどいた。
「ほら　メイサちゃん！」
昴くんが言った。
あたしは観念した。
「お願い！！このこと、誰にも言わないで！」
「……」
昴くん…っ！！
「何言ってんだよ！言うわけないじゃん！」
昴くんは人懐っこい笑顔を見せた。
「それにしても、何でわかったの？」
「大ファンだからに決まってんだろ！」
「ありがとう・・こんなあたしのファンでいてくれて…」
昴くんは再び、人懐っこい笑顔をみせた。
「そーだ！明日櫻井のスタジオ、行ってみたいなっ♪」
ええーっ！？でも明日の撮影は…男の子と撮るんだよ！！？だめ！絶対ダメ！
断るのよ、つぐみ！！
「えーと、明日はちょっと…」
「ば　ら　す　ぞ！」
「…っ　じ…じゃあ、明日の放課後四時に、時計台で待ち合わせね・・」
「おっしゃー！！」
…とうとう、オッケーしてしまいました・・っ！どうしよー！！
・・・翌日・・・
「えぇ！？スタジオに連れて行くぅ！！！？」
「まりか！！声デカイ！」
あたしはひそひそと、まりかに耳打ちをした。
「つぐもやるねぇー♪」

「いや…無理やりだよぉ…←ばらすって言われてさ…」
「へぇー…まっ、いーじゃん！がんばれ★」
「それがさぁ…男の子と撮影するの！ｋｉｓｓ　ｍｅルージュの宣伝だし・・」
「まぁ、色っぽい。」
「もぅ、人事だとおもってぇー！！」
「まぁ、がんばんな」
「んー…」

とうとう、運命の放課後！あたしは、昴くんに待たせまいと十分前に来た。
でも、そこにはもうすでに昴くんの姿があった。
「昴くん！早いねッ」
「おぅ！！って、やっぱ格好は『櫻井』だな！」
「そりゃあそうだよ！ばれたらやだもん」
「そうだな！…じゃ、いこっか。」
手に、温かい感触。昴くんと手をつなげるなんて、夢を見ているようだった。
でも、あたしの心臓のドキドキが、昴くんに手から伝わりそうで、いっそうドキドキした。
そんな幸せの時間もつかのま、すぐにスタジオについてしまった。
「すげ…」
昴くんがつぶやいた。
「メイサちゃん！！ん？そちらは？まさか、彼氏じゃないでしょうね？」
「いえっ、…友達です！！」
「フーン…まぁいいわ…でも、ちょうどよかった。相手役が急なキャンセルとっちゃって、来れないのよぉ」
「でもぉ…」
「大丈夫！！顔がわからないように撮影するから！！やってくれな

い？」
昴くんは迷わず、
「ハイ！」
と言った。
マネージャーは、反対するあたしそっちのけで話を進め、ついに決定してしまったのです。昴くんとの共演を…
「昴くん…だっけ？あなたはまだ素人だから、色っぽさが出ないと思うの。だから、好きな人を想像しながらやってみて？」
「はい！」
何それ…好きな人？あたしが一番考えないようにしてた言葉じゃん。何でそんなイジワル言うの？
──昴くんは、カメラのシャッター音がなるたびに
「好きだ…」と呟いていた。
「お疲れ！メイサちゃん！！」
「……。」
「彼、素人にしてはすごいよかったわね！！でも、メイサちゃんは調子悪かったの？表情がかたかったわよ？私情は仕事にもちこんじゃだめよ？」
「すいません」
あたしはか細い声で答えると、飛び出した。
「ちょっと…！？メイサ！？」
気がつくと顔はぐしゃぐしゃになっていた。
「…っふ…ッ」
あたしはその日、夕食を食べることができなかった。

「おはょ…」
あたしのはれた顔を見てまりかはびっくりした。
「えっ！？ちょっと…つぐ！？どうしたの！？」
「まりかぁ…」
ああ、また涙が出そうだ。

「とりあえず、屋上いこ？」

「昴くんに好きな人？」

「…うん…」

「そりゃいるよ！つぐって結構鈍感～！！」

「ひ、ひど…」

「後ろみて！」

まりかの言うとおり、後ろを向いた。

そこにいたのは、昴くんだった。

「よぉ、櫻井…」

「じゃ、あたしはこれで★ファイト、昴くん♪」

「ありがとな、まりか。」

そして、まりかは行ってしまった。

思わず顔が赤くなる。二人っきりだから．．

「好きだ」

突然の告白に、戸惑いを隠せない。

「俺はメイサじゃなくて、櫻井つぐみが好きなんだ！」

「うそ…」

「うそじゃない…」

「あたしも好き！昴くんのことが…」

「俺等、両思いじゃん！」

「うん！！」

「俺、櫻井がメイサになる前から好きだったんだぜ！！」

昴くんがぼそっと、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で言った。

そして、あたしと昴くんの至福の時はさっそうと過ぎていき、あたしたちは一時間目の授業をサボることになる。

――あたしがメイサだって、初めからきづいてたんだね！昴くん、大好き！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2726f/

シークレット彼女

2010年10月28日08時49分発行